鳥取

江島大橋
この写真ではわかりにくいので一度画像検索して頂きたい

今回の山陰旅行で一番良かったといえるのが鳥取である。鳥取には魅力的な場所がたくさんあった。結論から言ってしまうと鳥取に関しては、時間の関係で、ほんの少ししか、味わえなかったのではないだろうか。現時点でもう一度行ってみたい場所ナンバーワンである。今回の旅では鳥取市に宿泊したが、他にも泊まってみたかった街がいくつかあったのだ。行ってブラブラしているだけでは、見尽くしきれない様な場所ばかりである。島根から中海(なかうみ)沿いをずっと車で走って、我々はまず鳥取県境港市へと向かった。湖沿いをずっと走っていると、突如、松江と境港(さかいみなと)を結ぶ橋があらわれる。この橋がすごいのである。おそらくこれまでみた橋の中で最強である。江島大橋というのだが、日本最大のコンクリート製桁橋であり、それはまさしく天に向かって突き上げていくが如く、そそり立っている。この橋は某自動車会社のテレビ CM にも使われたぐらい、インパクトがすごい。走行中の車の中から撮った写真を一応掲載しておくが、何せ、その佇(たたず)まいが全く伝わらなので、ぜひ一度『江島大橋(えしまおおはし)』で画像検索して頂きたい。

そして到着、境港。実際の話、今回の旅で私はここを一番楽しみにしていたのである。私が愛してやまない水木しげる先生の故郷である。私が高校生の時、NHK の朝ドラで水木先生のドラマがやっていて、ミーハーな私は先生が 40 年近く住んでいたという東京の調布市を訪れたことはあった。ところが今回はもう先生のホームタウンなのである。もちろんゲゲゲの鬼太郎も大好きなのだが、私は妖怪そのものにも底知れない思いがある。現実離れした、不気味な存在でありながら、

みなとさかい交流館でみることのできる
妖怪巨大壁画

交番の前にも鬼太郎が

自然の驚異や、人としての在り方の教訓に通じるものがあり、それがまた唯一無二の存在であるという事がとても素晴らしいと思う。実際、行ってみると、もう街は妖怪フィーバーといった感じであった。だが不思議な事に、変につくられているといった感じではなく、境港の自然の良さも尊重していて、非常に感じの良い雰囲気であった。境港は非常に興味深い街である。鳥取県の中でも一番人口の少ない市なのである。面白いことに、ここの人達はなかなかあたたかい。喫茶店は非常にアットホームな雰囲気だったし、交番のお巡りさんも親切に向こうから話しかけてくれるといった感じである。それと魚市場。今までいろいろなところの魚市場を見てきたが、ここは魚も人も活きがいいといった感じである。おばちゃんが新鮮なカニを持って、お客さんに「食べてみ！食べてみ！」と渡してくれる。本当に今回の山陰旅行でなぜここに宿泊しなかったのかが悔やまれる。魚もすごく新鮮そうだったから、美味しいに違いない。

　次に米子。境港から、車で 1 時間走ったくらいで着く。米子と境港の間には空港もあるぐらいなので、駅もまあまあ大きかった。米子に来た目的は、飲み屋街の散策である。とはいえ宿泊の予定もなければ、訪れたのは真っ昼間である。一緒にいた者が昔を懐かしみどうしてもとのことであった。「朝日町」という飲み屋街であるが、場所が少し駅から歩くので、タクシーを使うことにした。とてつもなく狭い通りをタクシーで走るのである。乗っているこちらもヒヤヒヤ

境港の魚市場

朝日町の飲み屋街

する。辿（たど）り着いた先の飲み屋街は、独特な雰囲気を放っていた。これまで日本各地の飲み屋街を見てきたが、こういう場所ははじめてかもしれない。狭い通りに、これでもかといわんばかりの飲み屋の看板がずらっーと並んでいるのである。なんせ真っ昼間がゆえに、お店がやっているのかそれとも廃屋なのか分からないが、どことなく飲み屋街の通りそのものにある種の退廃的な感じがしており、正直、面白そうではあった。朝日町界隈を歩いていると、加茂川という小さい川が出てくる。そこの川沿いに「咲（わら）い地蔵」というお地蔵さまが現れた。首を横に傾げ、なんだか素直そうに見えるお地蔵さんの姿はなんとも可愛らしい。おそらくそんなに歴史あるお地蔵さまではないが、ここら辺では

朝日町
路地裏の飲み屋街

加茂川沿いの咲い地蔵

シンボル的存在ではないだろうか。一緒にあった石碑には坂村真民（さかむらしんみん）の「念ずれば花ひらく」の言葉が書かれてある。「自分がいまやるべきことを一生懸命やっていれば良い」といった内容である。ありきたりではあるが、まあ有り難きお言葉といったところか。

鳥取に来たからには、砂丘

のどかな雰囲気佇む　東郷池

に行かなければという事で、いざ砂丘へと車を走らせた。途中、また大きな湖が現れたので、車を止めて写真を撮った。そこは東郷池という湖であった。池とついているが湖である。湖の中央付近から温泉が湧くようであり、湖畔に『はわい温泉』と『東郷温泉』がある。今回の旅で、ちょくちょく大きな湖を見た。これまで私自身、関東でずっと生活してきたが、あまり湖に馴染みがなかった。千葉に行けば印旛沼や手賀沼などがあるが、沼と呼ばれているだけあって、少し違う。いくら海水が交じっている汽水湖とはいえども、海とはまた違ったのどかな感じが非常に好きである。なんだか安心する。

　砂丘に向かって車を走らせていたはずではあるが、なぜかまた途中で寄り道をして、「倉吉」に立ち寄った。悠々自適な旅である。なんとなく町の名前は昔っぽくて、情緒ありそうな気はしたが、とても静かな町である。駅前には 2 人の子供が笛と太鼓を奏でている像がある。説明も書かれていて、「打吹天女伝説（うつぶきてんにょでんせつ）」という内容であった。この伝説をざっくり説明する。東郷池で美しい天女がひとり水浴びをしており、それに一目ぼれした男は彼女が天に戻れないように衣服を隠してしまう。天に戻れなくなった天女はこの男と結婚し、2 人の子供を授かる。これが「お倉」と「お吉」である。ある日、天女は隠されていた自分の羽衣を見つけ、それを羽織った途端に、2 人の子供への愛情が消え、そそくさと天へと返ってしまった。忽然（こつぜん）と姿を消した母を淋しがり、お倉とお吉は打吹山（うつぶきやま）という山で笛を吹き、太鼓を打ち鳴らして、母を呼んではみたものの、彼女が 2 人の前に姿を現すことは二度と無かったというなんとも悲しい話である。これがおそらく倉吉という地名の由来にもつながっていると思

倉吉駅前にある
お倉とお吉像

コナンの作者 青山剛昌も鳥取県出身

うのだが、ここで気になるのが打吹山である。調べてみると、この山は標高 204 メートルでそんなに高い山ではないが、打吹城跡や八十八か所石造群、はたまた大山(だいせん)を一望できるほどの展望台もある。そういえば、大山(だいせん)の事を書かないわけにはいかない。なんせ中国地方最高峰の火山である。標高 1709 メートルで、東の富士山、西の大山と呼ばれているぐらいである。1 年間で 900 万人が登山に訪れるほどの人気の山である。ネットに掲載されている写真を見る限り、景色もまさしく絶景である。2018 年には開山 1300 年を迎える様で、あの出雲神話にも度々登場するというほどの山である。日本史に関しても、かの後醍醐天皇は幕府に閉じ込められていた隠岐(おき)の島から命がけで脱出し、辿り着いたのが大山といわれている。打吹山も大山もそうだが、私は割と山が好きなので、一度こういう山で登山してみたいものである。倉吉はその他にも、レトロな街並みも一見の価値がありそうな場所ではある。ここもまた、もう一度訪れなければいけない場所である。

そして砂丘である。鳥取といえば砂丘である。南北 2.4 キロ、東西 16 キロにも及ぶ広大な砂丘をひたすら歩く気にはならないし、どんなに歩いたところで結局砂しかないのである。それでもやはり行ってみたいものである。ここの砂というのは、もともと中国山地の岩石が浸食されて、それが千代川などの河川によって運搬され、鳥取平野を埋め尽くし、さらに日本海に流出する。日本海に出た砂が沿岸流に乗って再び陸地に近づき、海岸に打ち上げられた。こうして鳥取砂丘の砂は運んでこられたといわれている。我々が

鳥取砂丘

着いたのが、夕方近いという事もあったせいか人はほとんどいなかった。よくテレビなどでラクダが歩いているのを見たので、すこし期待はしていたもののラクダはいなかった。多分午後ぐらいで帰ってしまったのだろう。以前に人から聞いたのだが、千葉の九十九里浜でも、ラクダを置いて地元の PR をはかっていたという事である。それにしても砂丘をラクダで遊覧するなんて本当に洒落たアイディアだと思う。まるでどこかの国の砂漠の気分を味わえそうである。それ以外にも、興味深いのが、2011 年に砂丘から 4 人の人骨が発見されたという事である。しかもこれらの人骨は江戸時代後期から明治時代初期の間に埋葬されたものだといわれている。砂丘に埋葬された理由として考えられているのが、死亡したコレラ患者を伝染予防のためここの砂丘に埋葬したのではないかといわれている。その人骨がつい数年前まで、誰にも気づかれることなく、普通に埋められていたとはなんとも不思議な話である。

　それから鳥取はらっきょうが有名である。らっきょうというのは非常に生命力が強いことから、水の少ない砂丘地でもよく育つという性質がある。らっきょうの起源は江戸時代にまでさかのぼる。参勤交代の付け人が持ち帰ったことがはじまりという見方が強い。個人的にかなり衝撃的だったのがらっきょうの花である。あのクセのある風味に似合わず、実に美しい紫色の花を咲かせる。らっきょうの畑を画像検索して頂けたらお分かりいただけると思うが、もうラベンダー畑に匹敵するぐらい、一面紫になる。

　あとおなじ名産品で外せないのが、梨であろう。鳥取の梨といえば、二十世紀梨だが、その出荷量は、国内生産量の約半分を占め、全国第 1 位なのである。面白いことにこの二十世紀梨はもともと、千葉県の松戸が発祥の地とされており、松戸市にはそれに肖り、二十世紀公園というものまでつくっているのである。二十世紀梨が鳥取に導入されたのは、それからしばらく後の 1904 年である。ちなみに鳥取の県花は二十世紀梨の花である。前述した倉吉市には『二十世紀梨記念館』という場所もあるとのこと。

　我々が鳥取にいたのが、ちょうどゴールデンウィークだったのだが、5 月 1 日を『恋』と

かけて、期間限定でピンク色のSLを走らせたり、ピンク色のカレーや醤油を発売したりするといった一大プロジェクトが行われていた。よく地方の方に行くと、「恋人の聖地」と掲げて集客を図ろうとしている観光地はあるが、逆にここまで突拍子もないことをされると好感が持てる。鳥取のホテルに滞在していた際、朝のニュースはこの話題で持ちきりだった。確かに普通だったら、鳥取から連想する色といえば、やはり砂丘の茶色である。決して良い色ではない。鳥取もおそらくイメージみたいなものを気にしていたのだろう。また驚くことに、鳥取県は日本の都道府県の中で1番人口が少ないのである。全国のどこの政令都市よりも少なく、政令都市以外で最大の千葉県の船橋市よりも人口が少ないといわれている。おそらく『恋の日』みたいなのをわざわざつくったという事は、少子化の問題等を踏まえてのことでもあると考えられる。ピンクのカレーや醤油が直接的に少子化の問題に結びつくかどうかはともかく、少なくとも話題にはなるから、鳥取に来る人間は増えるはずである。また近頃はやりの「撮り鉄」だって、やはりピンクのSLといわれたら撮っておきたくなるはずである。

これまでたくさんの都道府県を廻ってきたが、今回の鳥取に関しては、私の中ではなかなかレベルが高かったというか、好感が持てた。鳥取県内の街でも、一晩泊まってみたいと思えた場所が何か所もあった。正直、鳥取といわれてもそんなにパッとしないというか、今回の旅でも、正直、完全にノーマークではあった。自然を尊重していて、なおかつ地域活性化のアイディア等も非常にナイスではあるが、県内の街すべてに共通していえたことは人が優しかったという事が一番だと思う。そう、鳥取県民の人柄である。夜の飲み屋もそうだが、なんだか「ただいま」といってもう一回戻ってきたいと思える場所がたくさんあった。

ウェバー伊安